

りびんぐらいぶず 平成二十一(二〇〇九)年九月第一号

お正信偈拝読 その五「等覚を成り大涅槃を証すること」

ご讃題 等覚を成り大涅槃を証することは、必至滅度の願(第十一願)成就なり。(Ref:行巻「正信偈」註釈版聖典 P203)

ご讃題「必至滅度の願のお心」

ご讃題の「^{とうがく}等覚を成り^{だいねはん}大涅槃を証することは、^{ひっしめつど}必至滅度の願(第十一願)成就なり」は、^{じょうじゆ}必至滅度の願(第十一願)の心を詩句にしたものです。「等覚を成り、大涅槃を証す」とは、二つ利益「現当二世の利益」と昔から言われて居るところであります。

「^{げんとうにせい}現当二世」とは、現在の生(娑婆)と当来の生(来世)を指します。

「^{とうがく}等覚」というのは、仏様の悟りの一步手前の位です。

親鸞聖人は、まず、私共が阿弥陀如来のまことのお心を頂戴したそのときに、来世には必ず浄土に生まれて仏と成る位、つまり等覚の位、それを^{げんしょうふたい}現生不退、この世にて仏となるのに決った位から決して退くことがないという^{げんしょうしょうじゆ}現生正定聚の位に就くとご覧になりました。

阿弥陀如来のご本願を信じ、阿弥陀如来の大悲の働きを素直に喜ぶ者は、この身今生において、等覚を成るといふのです。

「等覚」というのは、^{みろくぼさつ}弥勒菩薩のお悟りの境地を申します。弥勒菩薩と同じお悟りの境地に至る。

いつかという、現生において今ただちに頂戴するのです。

そこで、これを「^{げんしょうしょうじゆ}現生正定聚」、または「^{げんしょうふたい}現生不退」とも申します。

お^{どうぎよう}同行の間で問題となりますのは「一体、私はいつ救われるのですか、どうすれば救われるのですか」というお尋ねであります。

それは他でもない、阿弥陀如来より賜るまことのお心を頂戴すれば、この世において、ただ今、ここでお救いに与るのです。

この私は凡夫です。これについて「凡夫」といふは、^{むみょうぼんのう}無明煩惱われらが身にみちみちて、欲もおほく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえずと^{すいかにかが}水火二河のたとへにあらはれたり(一念多念証文『』、註釈版聖典 P693)とご開山聖人はおっしゃっておいでです。

^{とんよく しんに くち}貪欲、瞋恚、愚痴の三毒の煩惱の絶え間ない愚かな私ではありますが、阿弥陀如来の大悲の働きに遇い、本願招喚の勅命に喚び覚まされるそのとき、既に阿弥陀如来の大悲の働き、光明の中にすっぽりと包まれ、如来様のふところに抱き取られているのであります。

大悲の働きに包まれているその状態を指して、等覚の菩薩、現生正定聚の菩薩、仏さまの一步手前の位に就いているといふのであります。

他力の念仏者は、等覚の弥勒菩薩と同じだといふのです。

如来より賜る本願の信心と念仏を指して他力の信心、念仏と申します。その本体は、南無阿弥陀仏のお名号に他ありませんから^{ぎょうしんふに}行信不二と申します。また、他力の念仏と信心は互いに離れて存在するものではありませんから、^{ぎょうしんふり}行信不離とも申すのであります。

その行信不二のお念仏を称え、信心を賜る念仏者は、等覺の弥勒菩薩と同じであって、当来には必ずお浄土に生まれて仏様となって、苦惱の生きとし生ける者を悉くお救い申す尊い働きに入るのであります。

ただ今現生で就くその等覺の位を「現生正定聚」というのであります。

大河ドラマ「篤姫」に登場した伊井直弼は従兄弟「撰専」は福田寺という浄土真宗のお寺の住職をしていました。二人は歳も近かったそうです。ですので、直弼は、よく福田寺をお訪ねになり、撰専師から浄土真宗のみ教えをお聞きになったそうです。

そしてその結果おっしゃった言葉が「平生業成の教えが素晴らしい」だったそうです。「平生業成」とは、現生正定聚の教えです。「平生」とは、「ただ今、このとき」を指します。

阿弥陀如来の勅命に喚び覚められた者は、ただいま現生正定聚について如来様のお慈悲を慶ぶ身となる。そういう教えであることを知って「平生業成の教えが有難い」と直弼公は語られたのです。

そして命終われば大涅槃を極楽浄土において開くことになる。

大涅槃とは仏の悟りのことです。

今生の命を終って浄土に生まれたそのときに、阿弥陀仏と同じ仏の悟りを開くということが大涅槃を証することになるのです。

これらのことが第十一願の「必至滅度の願」の中で誓われているというのが「必至滅度の願(第十一願)成就なり」なのです。

振り返ってみましょう。直前のご文「本願名号正定業」は、第十七願の

リビングライブズーお正信偈拝読 その五「等覺を成り大涅槃を証すること」

「諸仏称名の願」の働きを説いた「教行信証」の行の巻を括る願文であり、「至心信楽願為因」は、他力回向の南無阿弥陀仏に込められた本願招喚の勅命に対して、素直に胸襟を開く念仏者は、そのまま如来のまことのお心を頂戴することができる第十八願の「至心信楽の願」のお心を顕した「教行信証」の信の巻をくくる願文であり、ただ今頂戴した、第十一願「必至滅度の願」は、「教行信証」の証巻を括る願文であります。

あと残りの二願は、第十一願の光明無量の願、第十二願の寿命無量の願であって、当来に往生させて戴く真実のお浄土を明らかにした真仏土の巻を括る願文であります。

五願は中心となる第十八願文のお心を開いたものであります。

こうして、法蔵菩薩因位時から始まって阿弥陀如来のお心を顕す全十八句は、阿弥陀如来の本願が成就して、私共が弥陀同体の仏になるという往生成仏に至るまでの内容が掲げられていることがわかるのであります。合掌(玄宥記)。

(あとがき)本一文をものするに当たっては、次のご書物を拝読して参考にさせていただきました。合掌

自照社出版、瓜生津隆真他著「正信偈のこころ」P68～73

NHKライブラリー刊、早島鏡正著「正信偈を読む」P58～60

正覚寺仏教壮年会例会	毎月第一日曜午後八時より
正覚寺仏教婦人会例会	毎月十六日午後七時より
著作編集兼発行元 りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)	
〒五二〇 〇五〇一 大津市北小松四五二番地 ☎&Fax 0七七 五九六 〇一六六	
✉ mhkatata@pluto.dti.ne.jp 使務 堅田玄宥	

平成二十一年八月一日初版発行、二十一年八月一日改訂版 2